2019.8.21

博物館 Dictionary No.217

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

特別企画「京博寄託の名宝」に展示されている作品について勉強してみよう。

振袖をめぐる物語
―寄託がもたらす奇縁―

金色の紐で束ねられた、とりどりの色と文様の熨斗（贈りものに付ける飾り）が、赤地のキモノの中を飛び跳ねるように広がっています。誰の目にもゴージャスに映るこのキモノですが、ちょっと前までは一部が切り取られているうえに裏地もなく、展示しづらい状態でした。昭和３９年にはすでに国の重要文化財に指定され、評価の高い作品ではあったのですが、近年までなかなか修理に手を付けることができずにいたのです。その背景には、この振袖が置かれた複雑な事情がありました。

重要文化財　束熨斗文様振袖　江戸時代　友禅史会蔵　修理後 背面

振袖の所蔵者は友禅史会という、友禅染関係の業者で組織された団体です。しかしながら、大正時代にはすでに、この作品の管理は友禅史会から京都国立博物館に任されていました。このように、所蔵者が作品を博物館に預けて保存管理をたくす代わりに、作品を研究や展示に利用することを認める制度を「寄託」といいます。この振袖は、大正時代からずっと、京都国立博物館の寄託品だったのです。

ところで、この振袖は、最初から友禅史会の所蔵品というわけではありませんでした。野村正治郎（１８７９～１９４３）という、染織品を専門に扱う古美術商から寄贈されたものだったのです。それではなぜ、野村は売り物にもなるであろうこの振袖を、友禅史会に寄贈したのでしょうか？

それは、お気に入りで手放すつもりなどなかったこの振袖の代金を、なかば強引にある人物から手渡されてしまったからでした。その人物とは、ロックフェラー二世。ニューヨークにある高層ビル街、ロックフェラー・センターでその名を知られる、アメリカの大富豪です。野村は高校からアメリカに留学した国際派の古美術商で、ロックフェラー二世も顧客のひとりでした。

重要文化財　束熨斗文様振袖　江戸時代　友禅史会蔵　修理前 背面

時は大正十年にさかのぼります。

来日して京都の野村の店を訪れたロックフェラー二世は、この振袖をいたく気に入り、譲ってくれるよう野村と交渉したそうです。しかし彼は、この振袖は京都の染織産業が参照するために必要だからという理由で、申し出を断りました。ひとたびはあきらめたかのように見えたロックフェラー二世でしたが、日本を離れる際、「この振袖が本当に気に入ったから、京都のために贈りたい」とのメッセージを添え、野村に高額な小切手を送ってよこしました。この心意気に感動した野村は、振袖を自分が持っていてはいけないと考え、友禅史会に寄贈することにしたのです。そして友禅史会は、この振袖を最善の状態で保存するために、京都国立博物館へ寄託しました。

しかし、昭和に入ると、世界情勢は次第に不安定になり、日本も戦争へと突き進むことになりました。そして、友禅染のようなぜいたく品は、国の方針で生産が許されなくなってしまったのです。友禅史会に名を連ねていた業者の多くは廃業せざるをえなくなり、終戦を迎えた時には、友禅史会のメンバーの多くは連絡がとれなくなっていました。ただ、博物館に寄託された振袖だけは、かわらぬ姿で存在し続けていたのです。

野村の手元にあった時から、この振袖があまりにも美しいからでしょう、一部だけでも参考にほしいという人がいたようで、振袖の前面は切り取られてつぎはぎだらけ、背中側も裾部分がなくなっていました。博物館では修理をしたいと願っていましたが、所蔵者である友禅史会に頼ることもできず、また寄託品に多額の修理費用を工面することも困難でした。

そんな状況を大きく変えたきっかけは、博物館で開催された土曜講座でした。この振袖をめぐる困難な事情を館員が明かしたところ、講座に参加していた女性から、振袖のために高額な修理費用を寄附したいとの申し出が、平成十六年にあったのです。この奇特な支援によって、振袖は二年をかけて修理され、かつての華麗な姿を取り戻すことになりました。

このように、振袖は、自らの魅力でたくさんの人の心を動かし、小さな奇跡をおこしてきました。それを蔭で支えたのが、博物館の寄託という制度だったのです。この振袖はこれからも博物館で守られ、末永く、人々の心を動かす作品であり続けることでしょう。

（工芸室　山川　暁）

印刷・富士印刷社